〈編集後記〉

## 関西自然保護機構会誌の投稿について

編集後記を書くのも，既に今号で3回目となりました。26巻2号，27巻1号と今号が無事に発行できたのも，前迫ゆり編集幹事の懸命な努力があったからこそと感謝しています。同時に，編集委員長としてもう少し協力すれば，前迫さんの作業ももっと楽になったであろうし，また会誌の修正箇所も少しは減らすことができたのではと反省もしています。なお，編集作業のなかで前迫さんが最も苦労されておられるのは原稿集めです。どうか，一人でも多くの会員各位の投稿をお願いいたします。

今年度のKONC公開シンポジウムは，滋賀県において「田園の生き物を考える－特に外来生物と営農，生態系を中心として－」をテーマに開催しました。その後，9月にはピラニアが琵琶湖で捕獲され，10月にはセアカゴケグモが発見されるなど，滋賀県では外来魚とともに外来種問題が大きな課題となっています。

こうした外来種問題や田園地域における生物多様性保全の問題，水田畦畔や道路法面の外来種による緑化問題などに関しては，特に行政や環境関係事業者などから大変関心を持たれている内容であります。また，会誌が「地方自然誌の専門誌」をめざしていることからも，そうした内容について会員からの投稿を期待しています。

（小林圭介）

# KONCの活動とその重要性

早，今年１年を振り返る時期となりました（本号を手にする頃はもう新年を迎えていることでしょう…）。KONC主催あるいは協賛のイベントは，2005年２月の「京都市大原野森林公園」で開催された現地見学会に始まり，６月のシンポジウム「田園の生きものを考える」（本号に特集掲載），10月の「和歌浦の干潟見学とセミナー」（次号に特集掲載予定），そして12月のシンポジウム「生物多様性と外来種」（紀伊半島研究会主催。次号に特集掲載予定）にいたるまで，実に活発にかつ多彩に行われました。ご参加・ご協力いただいた多くのみなさまにあらためて感謝いたします。

これらのテーマは，いずれも地域の自然環境や生きものの保全を，フィールドに視座をおいて考えるものであり，自然の重要性と脆弱さにあらためて気づかされるものでした。2005年６月に外来生物特定法が施行され，違反した場合にはなんと300万円の罰則金が課されるということですが，外来種の選定を含め，法律そのものもまだ十分とはいえませんし，法律ですべてが解決するわけではないことは環境省も，また我々も感じているところではないかと思います。外来種の分布拡大は生態系および人間生活そのものに影響を与えるという認識がある一方，生物多様性に対する価値観は必ずしも一定ではありません。外来種がなぜ問題であり，生物多様性がなぜ必要かということに対する答はそう単純なものではないでしょう。

このような議論の場として，本会と本誌がますます重要な役割を果たすであろうと考えます。編集後記のなかで，編集委員長小林圭介先生が，随分，編集幹事を持ち上げてくださって，穴があったら入りたい思いですが，本誌が果たす役割の大きさをあらためて認識し，また力不足を日夜顧みての編集作業が続いています。

本号には６月に実施されたシンポジウムの特集が掲載されていますが，いずれも著者が長年，フィールドを通して得られた調査研究とそれをベースにしたお考えをまとめられたものであり，玉稿をいただきました。また「世界の自然から日本の自然を考える」と題し，本会副会長小川房人先生による新シリーズがスタートしました。まさに世界を歩いて自然を見つめてこられた先生の珠玉の随筆です。若手研究者シリーズは，お忙しい中，編集者の依頼を快く引き受けていただき，神戸大学武田義明先生が学生・院生のとりくみを寄せてくださいました。投稿原稿は若手研究者やナチュラリストの方の労作が揃いました。表紙写真は大原野森林公園をはじめ，地域の写真を撮り続けてこられた近藤さんに提供いただきました。本号も多くの方のご協力により発刊することができました。誠にありがとうございます。

2006年も本誌へのご寄稿・ご投稿をお待ちしています。会員のみなさまにとって良い１年でありますことを心より祈念いたします。

（前迫ゆり）